

# NEWSLETTER

先生方と私たちC・Z科図書委員がおすすめの本や、作家を紹介します。NEWSLETTERが本に触れるきっかけになれば幸いです。

## 『合成テクノロジーが世界をつくり変える』

～生命・物質・地球の未来と人類の選択～

クリストファー・プレストン

(No.1 C5 森 海斗)

この本は、人類の及ぼす惑星規模の変化を、テクノロジーの面から探究する、科学に対する考えを提唱しています。今や人類は、自然の仕組みの最も奥深くまで手を伸ばし、それをつくり変えようとしています。

こうしたテクノロジーによる変化は、気候変動や環境破壊などとはまた違った様相を示しています。気候変動などは人類が意図したわけではなく、産業・経済活動による意図せざる結果です。しかし、合成テクノロジーは、はじめから明快な狙いをもって、万物をつくり変えることを目的としています。人類が神の領域へと参入する、「合成の時代（シンセティック・エイジ）」が近づいています。

どこまで研究開発を進め、どこでとどめるべきなのか？ とどめる一線があるとすれば、その指針は何か？ 科学について考えさせられる本です。ぜひ、読んでみてください。



## 『みんな邪魔』

真梨幸子

(No.2 L3 永澤太智)

この本は、少女漫画「青い瞳のジャンヌ」をこよなく愛する”青い六人会”に起こるさまざまな恐怖を描いた物語です。辛い現実から目を背けるため”青い六人会”で集い合う中年女性たち。しかし、彼女たちが見せるのは’幸せそうな’姿だけ。飛び交う嘘。姑息な罫。そして起こる惨殺事件……。彼女たちは誰を信じればよいのだろうか。人間の弱さとそこから生まれる恐ろしさを感じられる作品となっております。



## 《先生からのおすすめ》

### 『人間をお休みしてヤギになってみた結果』

トーマス・トウェイツ

(総合科学教育科 佐伯 彩)

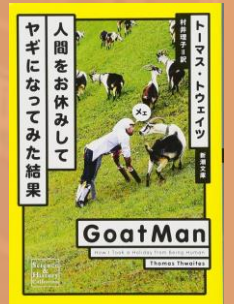
諸君は人間をお休みしたいと思ったことはあるだろうか。著者トーマス・トウェイツは、こうした願望を短期間ではあるものの実現した人物であり、本作は、そのプロジェクトを著したサイエンス・ドキュメントである。

では、著者トーマス・トウェイツについて簡単に紹介しよう。トーマス・トウェイツは、イギリスのロイヤル・カレッジ・オブ・アートを卒業した新進気鋭のグラフィック・デザイナーである。彼が大学院時代の卒業制作の内容をまとめた『ゼロからトースターを作ってみた結果』は、世界で大きな反響を巻き起こした。その彼が、次に著したのが本作である。彼はこのプロジェクトで、イグノーベル賞を受賞している。

なぜ、彼はこのようなプロジェクトを思いついたのか。無職だったからである。周りからお小言を頂戴し、これに対して「悩みたくない」と考えたところから着想を得て、人間をお休みして、本能的に生きる動物になったら悩まなくてすむのではと、プロジェクトを企画したのである。兎角くだらない理由からスタートしたプロジェクトだが、なんとウェルコムトラストというイギリスの医療系公益信託団体から助成を受けて、人間動物化プロジェクトが始動したのである。資金提供をしたウェルコムトラストは、ちゃんと申請書を審査したのだろうか。検討の余地があるだろう。

話を戻そう。プロジェクトの実験の詳細な動向については、ぜひ本作を読んで確認してもらいたい。私が本作をおすすめしたい理由は次の2点である。まず、一見くだらない動機ではあるものの、実験や考察内容においては解剖学や動物学などの自然科学的観点だけでなく、文化人類学や哲学など非自然科学的観点も絡めて分析している。近年、「学際的観点」というものが求められているが、研究者ではないからこそなした学際性ともいえるだろう。実際、著者がプロジェクトに際し、四足歩行器具・草食装置の開発において、多様な分野の知識人からの知見を得ているのは非常に興味深い。次に、本作は学術的に非常に興味深い研究であるにもかかわらず、口語的にまとめられていることである。

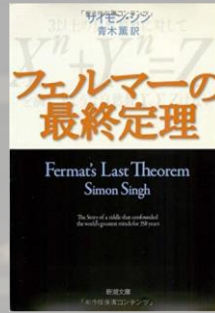
私見を加えながらも学術的観点は捨てていない著者のプロジェクトに対する積極的行動は、読んでいて感心せずにはいられない。一方で、人間的思考とは何かなど、現在関心がもたれている哲学的・心理学的・脳科学的視点から提示されるようなアクチュアルな課題にも触れており、「科学」を追求するものとして非常に興味深いものがある。諸君らの中には、自主探究という壁に直面している人がいるかもしれない。トウウェイツのように肩の力を抜いて、くだらないことを考えたら、そこから、新たな発見があるかもしれない。



## 『フェルマーの最終定理』 サイモン・シン

(No.3 Z4 古林 和樹)

3世紀もの間解かれなかった数学の超難問、「フェルマーの最終定理」には多くの数学者が挑み、苦杯をなめる結果となりました。中学数学の知識程度で理解できるこの問題の証明は、非常に困難なものでした。この本では、数学の歴史とともに「フェルマーの最終定理」に挑む数学者たちの姿が完全に解かれるまで書かれています。この本で、学校で学ばない数学の世界の広さを感じて、他の数学に関して調べてみてはいかがでしょうか。



## 『空の境界』 奈須きのこ

(No.4 C2 藤田 純矢)

「生きてる相手ならばたとえ神でも殺してみせる」  
2年間からの昏睡から目覚めた少女、両儀式は記憶喪失と引き換えにあらゆるものの史を見ることが出来る“直死の邪眼”を手に入れる。殺人衝動を持った式を襲うのは、子をテーマにした様々な怪異。

死とは何か？死に意味はあるのか？私たちは何のために生きているのだろうか？と、死生観について考えることのできる作品です。Fateシリーズの原作者である奈須きのこさんの作品でもあるのでぜひ読んでみてください。



## 『謎解きはディナーのあとで』 東川篤哉

(No.5 C3 類家 忠大)

発生する事件そのものは非常にシリアスでかなり本格的な推理小説なのにもかかわらず、難しい、分かりにくい、といったことはありません。テンポよくストーリーが書かれていることもあり、登場人物のキャラクターが非常に愉快でかつ彼らの目線で書かれているために読む側も分かりやすいです。シリーズ通して3作出版され、ドラマ化や映画化もしておりミステリーにあまり親しみがない人にもおすすめできるシリーズです。



## 『天久鷹央の推理カルテ』 知念実希人

(No.6 Z2 北上 茉依)

この本は、1人の女医と1人の内科医見習いの男性との医療小説です。女医、天久鷹央は変わり者だが、とても頭が良くおまけに夜目がききます。そんな女医と、天久鷹央に下僕扱いをされてしまう内科医見習いの小鳥遊の2人の身の回りで起こる病気のミステリー小説です。最初意味がわからない症状の患者らだか、そこには怖い病気が隠されていました。不思議な病気の症状と沢山の条件が重なって起こるミステリーを解決していくところがこの本の面白いところです。

シリーズになって色々な話があります。是非読んでみてください。



## 『永遠の0』 百田尚樹

(No.7 C4 上 裕樹)

物語の発端は主人公、健太郎とその姉、慶子の祖母がなくなったことがきっかけだった。今までおじいちゃんと慕っていた祖父は祖母の死をきっかけに自分が実の祖父ではないということを明かす。そして実の祖父は戦争で亡くなったと打ち明けたのだ。死んだ実の祖父がどんな人だったのか？その疑問を払拭するために二人は調査のため、各地を回ることになったのだった。ここまでがあらすじだ。私はこの本を読んで戦争の背景には色々な思いが詰め込まれているということを知った。そして一番は戦争で亡くなった祖父の心情の変化だろう。あらすじでは書いていないが健太郎と慶子が調べていくうちに次第に祖父の実態が明らかになっていく。ポイントは祖父が臆病者と言われていたこと。次にそんな臆病者である祖父が自ら十死零生と言われる特攻隊に志願したこと。臆病者という印象が悪いかもしれないが祖父は命を何よりも大切にしていたのだ。そんな祖父が自ら特攻隊に志願する心情の変化とは一体どういったものなのか？このような観点でこの本を読むと、戦争の悲惨さだけでなく戦争の時代を生きていた人たちの様々な心情を感じることができるのでおすすめです。



## 『薬指の標本』 小川洋子

(No.8 Z3 樋口志保)

この本は、恋愛の痛みと恍惚を透明感漂う文章で描いた二篇で構成されています。ここでは、二篇のうち的一篇を紹介します。ある人は楽譜に書かれた音を、またある人は火傷の傷跡を...。人々が思い出の品々を持ち込む標本室で「私」は働いています。ある日、標本技術士に素敵な靴をプレゼントされたが、それはあまりにもぴったりで、心も体も彼に侵されていきます。ふたりの奇妙で、ひそやかな愛をぜひ自身の目と心で感じてみてください。



## 『探偵AIのリアル・ディープラーニング』 早坂吝

(No.9 L4 佐藤 悠伍)

この本は、AIが探偵と言う面白い設定の小説です。父の死に疑問を抱く少年が父の残した『探偵』のAI「相以」とともに父の死に迫ります。その過程で、相以の双子として作られた『犯人』のAI「以相」を奪い悪用するテロリスト集団「オクタコア」の陰謀を知り父だけでなく母の死の真相に迫っていく。AIであるが故の欠点や、人間がしないような思考から生まれる新鮮な推理が面白い作品となっています。ぜひ読んでみてください。

